ブレジネフ期中ソ関係の初期設定

中居　良文

The Default Setting of the Chinese-Soviet Relations in the Brezhnev Era

Yoshifumi NAKAI

はしがき

本章はブレジネフ期（1964.10～1982.11）における中ソ関係の原型を探る試みである。そのため、本章は両国の指導者たちの最初の出会いを、最新の中国語資料を使って再構成する。今、ブレジネフ期に注目するのは何故か？ブレジネフ期の中ソ関係にはどのような特徴があるのか？そして、現代中国にとってこの時期の中ソ関係はどのような意味を持つのか？

本章がブレジネフ期に注目するのは、先ず、この時期に関する研究が他の時期に比べて少ないからである[1]。確かにスターリン期やフルシチョフ期のソ連に比べると、ブレジネフ期のソ連には歴史家たちの興味を引くようなドラマがない。ブレジネフ政権下のソ連に注目してきたのは、主に反体制知識人たちや、文学者たちであった。彼らは、当時のソ連社会を「停滞」「逼塞」「不毛」「退廃」[2]と言ったキーワードを使って表現してきた。

こうした状況は今や変わりつつある。冷戦終結とソ連解体の余波はブレジネフ期にも押し寄せた。1990年代以降、ロシアや西側の研究者だけでなく、中国の研究者たちもまた、「**苏共亡党**（ソ連共産党の滅亡）」と「**苏联解体**（ソ連邦の解体）」の原因究明に取り組みだした。ブレジネフ期のソ連は、従来とは違った角度から研究の対象とされるようになった。今では多くの研究者たちが、ソ連解体の原因はブレジネフ期にまで辿ることができると考えている。

本章がブレジネフ期に注目する第二の理由は、ブレジネフ期の政治・社会状況が、現代中国と似ているからである。ブレジネフ政権は、20年以上続いたスターリン政権と6年で突然終息したフルシチョフ政権の後に登場した。ブレジネフの肩には、長期独裁がもたらした弊害と、急進的改革がもたらした危機という二つの重荷がのしかかった。ポスト・毛沢東の中国もまた、1949年以来27年に及ぶ毛沢東政権と9年弱続いた胡耀邦・趙紫陽政権に続いて登場し、同じ重荷を抱えている。ブレジネフ期に両国が経験したことは、現代中国を理解するための参考になりうるのである。

では、ブレジネフの登場は中ソ関係にどのような影響を与えたのか？両国の社会的安定とは裏腹に、両国は対立を強めていった。平和と安定を保障するはずの、いわゆる冷戦構造は実は極めて不安定だったのである[3]。ブレジネフ政権が長期化するにつれて、中ソの対立は深まっていき、国境地帯では武力衝突が発生した。中ソ関係が改善するのは20年後のことであった。

では、ブレジネフ期の初期に中ソ関係に何が起きたのか？ブレジネフ政権と中国とが初めて対面したのは、1964年11月上旬にモスクワで開催された中ソ会談（以後、モスクワ会談）であった。中ソ両国はフルシチョフ失脚からモスクワ会談が終了するまでの約1ヶ月の間に、相手の出方を探り、相手の本音を知り、自らの基本路線を決めた。

政策決定において、最初の選択は重要である。最初の選択が後の選択を拘束するからである[4]。モスクワ会談

---

[1] 例外は、Breslauer, G(1982), Khrushchev and Brezhnev as Leaders: Building Authority in Soviet Politics. London: George Allen & Unwin.; Yanov, A(1977), Détente After Brezhnev: The Domestic Roots of Soviet Foreign Policy. Berkeley: Institute of International Studies, University of California.

[2] ソルジェニーツィンの諸著作を参照；日本人では、例えば、ブレジネフ期ソ連に滞在経験のある亀山と佐藤が、当時のソ連での生活を「甘い腐臭」の漂う生活と形容している。亀山郁夫・佐藤優（2008）、『ロシア闇と魂の国家』文春新書　44-45ページ

[3] 従って、「冷戦とは長い平和であった」というギャディスの見方は事実と符合しない。Gaddis, J(1987), The Long Peace: Inquiries into the History of the Cold War. Oxford: Oxford University Press.

を経て両国が辿り着いた結論は、その後の20年間に及ぶ中ソ関係の「初期設定」となった。この初期設定は、その後多少の手直しはあったものの、両国の第一人者が政策決定の舞台から退場するまで両国の政策選択を拘束し続けた。

通常、外交交渉の実態は公式文書には出てこない。どの国も「本音」は隠したいからである。幸い、ブレジネフ期については、中ソ両国の内部資料が限定的ながら利用可能となっている。本章で取り上げる研究者たちは、そうした内部資料を随所に使用している。ゴルバチョフは、ブレジネフ期の情報公開を進めたし、鄧小平もまた毛沢東時代についての情報の統制管理を一部緩めた。改革を標榜する政権は、過去の歴史に関してある程度正直になれるようである。

最後に本章が依拠する中国語文献について付言しておく。本章が引用する中国語文献は全て公式出版物である。本章の事例が中ソ両国に関わるものであることを考慮して、ロシア人研究者の著作の中国語訳文献と国際関係を専門とする中国人研究者の論文を主に参照した。中国語から日本語への翻訳は筆者が行なった。直接引用については出来るだけ中国語原文を示すようにした。もとより、これらの文献の選択には筆者の主観が反映されている。また、中国国内の出版物には、編集、翻訳、出版の過程において何らかの修正や加工が施されている可能性があることを指摘しておきたい。

第1節　フルシチョフ失脚（1964年10月15日）前後の中ソ関係

1. フルシチョフ失脚とは何か

一般に、政権交代は二国間関係が変化する契機になることが多い。専制国家の場合、変化の幅は大きくなることが予想される。しかし、フルシチョフ失脚後、中ソ両国の関係は大きく変化せず、従来からの対立がむしろ激化した。それは何故だろうか。

フルシチョフ失脚に関する中国語文献を調べてみると、当時のソ連と中国は同じ事象について極めて異なる解釈をしていたことが判明する。両国とも、自分たちの都合に合わせて事実を解釈したのである。

1）ソ連の見方

先ず、ソ連側の解釈から見ていくことにしよう。ロシア国家現代史档案馆副主任のプロズメンシチコフ（Prozumenshchkov）によれば、フルシチョフ失脚は、旧ロシア帝国で何度も繰り返された「宮廷政変」に他ならない[5]。トップが交代しただけであるから、政権の基本路線に変更はない。フルシチョフ時代に設定された基本路線、即ち「反スターリン・平和共存・対米パリティ[6]の追求」は引き続き維持される。ブレジネフらは、フルシチョフを「同志」と呼び続けた。ブレジネフらは、病気を理由にフルシチョフを引退に追い込んだ。それは、やや強引なやり方ではあるが、フルシチョフの冒険主義と独裁傾向に終止符を打つためには必要な措置であった。

2）中国の見方

毛沢東の見方は異なっていた。華東師範大学国際冷戦史研究中心研究員の李丹慧によれば、毛沢東はフルシチョフ失脚をソ連の修正主義路線が破綻した結果だと見た[7]。中国は1963年6月以来「フルシチョフの修正主義に反対」するキャンペーンを繰り広げていた。今やその作戦が成功した。つまり、中国は国際共産主義運動（以後、国際共運）における主導権争いでソ連に勝利したことになる。中国こそが正しいマルクス・レーニン主義を代表しているのであり、その路線は社会主義陣営内で支持されている。従って、ソ連は今こそ、その誤った修正主義路線を改めなければならない。

次に、フルシチョフ失脚直後の両国の行動を追ってみよう。

3）ソ連の行動

ブレジネフらには、対中和解への期待感があった。何故なら、彼らは、対中関係悪化の責任をフルシチョフに被せた上で、その原因を除去したからである。彼らは、中国がフルシチョフ失脚を歓迎するはずだと考えた。フルシチョフ失脚は対中関係改善の糸口になろう。

フルシチョフ失脚の当夜15日の深夜から翌朝にかけて、駐中国ソ連大使のチェブロネンコ（Chervonenko）

---

[4] Pierson, P(2004), Politics In Time: History, Institutions, and Social Analysis. Princeton: Princeton University Press.

[5] Prozumenshchkov, M(2010),「**苏中和解的最後尝试：对最新解密俄国档案的解读**」沈志華　**李滨**（Douglas Stiffler）主編『脆弱的連盟：**冷戦与中苏关系**』北京社会科学文献出版社374ページ（原文ロシア語、中文訳）

[6] パリティ（parity）は通常、「対等性」もしくは「対称性」と訳される。国際関係において、いわゆる勢力均衡（Balance of power）が複数国間で成立している状態を指す。

[7] 李丹慧（2010）、「失去的机遇？：**赫鲁晓夫下台后中苏实现和解的新尝试**」沈志華・**李滨**『脆弱的連盟』392ページ

が中国対外連絡部副部長の伍修権と面会し、新指導部の成立を通告した。次いで、ソ連の主要メディアは反中宣伝を停止し、中国から届いた祝電を公開した。更に、ソ連は中国が実施した原爆実験に対して、公式には非難しなかった。ブレジネフは公開の場で、「フルシチョフ同志の言論と行動が中ソ関係に不健康な要素を引き起こしたが、フルシチョフ同志は退職し、中ソ関係の不協調要素は取り除かれた」[8] と発言した。

当時のソ連は中国との和解に格別に熱心だったわけではない。新政権が心配したのは、東欧諸国の離反であった。ブレジネフらは、先ず欧州の主要共産党に新政権の正統性を説明しなければならなかった。フルシチョフ失脚の影響で、外交部の命令系統は混乱していた。新政権内部でも意見の対立があった。駐中国ソ連大使館は中国との関係改善を優先することに反対した。中国を優遇すれば、中国以外の兄弟党に不要な誤解を引き起こすというのが反対の理由であった。

4）中国の行動

ソ連側から通報があった翌日、北京放送は反ソ宣伝番組を中止し、フルシチョフ失脚の事実のみを報道した。17 日には中国の公式メディアはブレジネフとコスイギンへの祝電を掲載した。その後 10 日間に亘って中国の公式メディアからソ連批判記事が姿を消した。

10 月 28 日、周恩来がソ連大使のチェブロネンコと異例の会見をした。チェブロネンコはそれまで数ヶ月間周恩来とは会えなかったので、この会見には特別な意味、即ち毛沢東からのメッセージという意味、があった。案の定、提案は大胆なものであった。周恩来は 11 月 6 日からモスクワで開催が予定されていたロシア革命 47 周年式典への中共代表団の派遣を提案した。翌 29 日、周恩来はチェブロネンコと再度面会し、中国側の最終提案を一方的に通知した。チェブロネンコの手元にはモスクワからの指示はまだ届いていなかった[9]。

提案は、周恩来自身がモスクワに赴くこと、モスクワにはユーゴ以外の全ての共産党代表が招待されるべきだという内容であった。周恩来はこの提案と同時に、主要な共産党指導者たちに式典への参加を働きかけた。周恩来は 29 日の晩にはルーマニア、北朝鮮、ベトナム、アルバニア、キューバの大使と会見、30 日の朝には東ドイツ、ポーランド、ハンガリー、ブルガリア、チェコ、モンゴルの大使と会見した。

中国のこうした敏速な動きは、二つの目的を持っていた。先ず、外交に不慣れなソ連の新指導部に対し、先手をとり交渉を有利に進めること。次に、モスクワでの式典と会談を中国の国際的影響力を宣伝するための場として利用することであった[10]。

2. モスクワ会談（11 月 8 日～12 日）

ロシア革命 47 周年式典と、それに続く中ソ会談は予定通り開催された。記念式典はソ連新指導部の振り付け通りに進行した。中国に特別な地位は与えられなかった。

式典終了の翌日から開催された中ソ会談は決裂した。モスクワ会談は妥協点を見出すための場とはならず、相手の意図と意志を探るための「威力偵察」の場となったのである。以下に会談までの経緯と、会談が決裂に至る経過を見てみよう。

1）ソ連の立場

10 月 29 日、周恩来の提案がモスクワに届いた。モスクワは中国の提案を大筋で受け入れた。ソ連新指導部にとって、10 月 28 日の周恩来提案は時宜を得たものであった。彼らは、中国がソ連よりも先に、関係改善のオリーヴの枝を差し出してきたと考えた。式典の準備は順調に進み、モスクワ会談への期待が高まった。

ソ連は中国の友好姿勢に期待した。フルシチョフ時代の中ソ論争はお互いが長々と持論を展開するだけの空虚なものだったからである。ソ連は周恩来が団長になったことを歓迎した。それは、毛沢東の本気度を示していたからである。中ソは代表団の訪ソを円滑に進めるべく、綿密な実務者交渉を行った。

記念式典の態様に関しては、ソ連は主催者としてのイニシアチブを譲らなかった。ソ連は断交に近い関係にあったアルバニアを招待しなかったし、「ユーゴは招くな」という周恩来の要求を無視した。

ソ連の新指導部には、中国との和解に懐疑的なものもいた。新指導部の二人の中心メンバー、ミコヤンとスースロフ、はフルシチョフ路線の忠実な実行者であった。彼らはスターリンを厳しく断罪しただけでなく、いわゆる毛沢東思想に対しても批判的であった。彼らは、毛沢東をスターリンの模倣者と考えた。彼らは、ソ連共産党第 20 回大会（以下、ソ共 20 大）とソ共 22 大の新綱領の起草に関わっていた。彼らにとって、これらの綱領を否定することは、自らの立場の放棄、即ち自己否定を意味した。

ソ連の官僚達もまた、対中和解に懐疑的であった。フルシチョフが長年に亘って育成してきた党幹部たちが今や権力機構の中枢に座っていた。彼らは、フルシチョフ

---

[8] Prozumenshchkov（2010）382 ページ

[9] Prozumenshchkov（2010）378-379 ページ

[10] 李丹慧（2010）397 ページ

[11] Prozumenshchkov（2010）380 ページ

改革を足がかりに台頭してきた特権的官僚層であり、毛沢東流に言えば「ソ連の新資産階級」[11] であった。ブレジネフ政権を支えていたのは彼らであった。彼らは、世界革命のために自らの特権と安逸な生活を犠牲にすることなど考えてもいなかった。

ブレジネフらは、中国側の出方をある程度は予測していたようである。ソ連共産主義青年同盟（以下、共青同）書記のパヴロフ（Pavlov）は中国が社会主義陣営内部の「階級闘争」を密かに支援していると報告していた[12]。ソ連は懐疑の念を抱きつつ、会談を通じて中国の本音を探ろうとした。

2）中国の立場

10 月 16 日夜半にフルシチョフ失脚の通報を受けた毛沢東は「一肯二看（先ず肯定し、次に相手の出方を看る）」方針をとることを決定し、毛沢東、劉少奇、朱徳、周恩来の連名で、ブレジネフ、コスイギン、ミコヤンの 3 名に祝電を送るよう指示した。祝電は中ソ両国人民の「友誼不断発展（友情の絶え間のない発展）」をうたい、17 日の人民日報の一面に掲載された。16 日以降、中国はメディアにおけるソ連批判を停止した。毛沢東は 10 月 27 日、大型代表団をモスクワでの十月革命記念式典に派遣することを決めた。代表団の団長は鄧小平ではなく、周恩来とする（団長・周恩来、賀龍、康生、劉暁、伍修権、潘自力、乔冠华）。鄧小平を団長から外したのは、中国側の配慮であった。鄧小平は 1960 年台初頭の中ソ論争において、フルシチョフ批判の先頭に立っていたからである[13]。

11 月 1 日から 4 日にかけて、毛沢東は政治局常務委会議を召集し、より積極的な対ソ方針を決定した。新方針は「一推二看（先ず主張し、次に相手の出方を看る）」である。会談では原則上の譲歩をしてはならず、中国の立場を強く主張する。ソ連の出方を観察し、「火力偵察（威力偵察）」を実行する。目標は「争取人心、積累資本（世論を味方につけ、味方を増やす）」であり、「国際共運分裂の責任をソ連に負わせ、国際共運の指導権を握ることである。」[14]

次に、モスクワ会談に至るまでの両国の動きを追ってみよう。

3）ソ連の行動

11 月 6 日にモスクワで開催されたロシア革命 47 周年式典に、中国は周恩来を団長とする大代表団を送り込んだ。ソ連側の接遇は表面的には丁寧であったが、実際は冷淡であった。式典での序列は名前順で、中国が特別扱いされることはなかった。ソ連はまた、中国代表団がこの式典を利用して宣伝を行うことを用心深く妨害した。周恩来は空港でも式典でも演説の機会を与えられなかった。ソ連は中国の宣伝活動に対して防御態勢を敷いたのである[15]。

ソ連の新指導部は記念式典の場を利用して、ソ連は原則問題では決して妥協しないという立場を表明した。ブレジネフは同日の開会式で演説し、ソ連の対外政策は終始一貫して不変であり、唯一正確なものであると強調した。

一方、中ソ会談に臨んでブレジネフ政権は以下のような「底線（ボトムライン、落としどころ）」を準備した。

① 過去に中ソ関係の扱いに「個人的誤り」があったことを認める。ブレジネフは 11 月 14 日の中央委員会で「フルシチョフにはソ連と中国が関係を改善するための犠牲になってもらう」と発言していた[16]
② 路線問題を棚上げし、先ず両国関係の正常化をはかる
③ 近い将来新たな国際会議を主催し、そこで新たな国際共運憲章を採択する。新憲章の起草委員会には、中国を含む全ての兄弟国に参加を呼びかける

4）中国の行動

11 月 7 日、中共政治局委員会が中南海で開かれた。毛沢東はブレジネフらソ連新指導部を「虚弱、胆怯的（虚弱かつ臆病）」で何らの決断もできないと批判した。同日夜、当日夕刻（モスクワ時間）に起きたマリノフスキー（Malinovskii）事件の電報が届いた。（後述）中国は正式会談に先立ち、ソ連を非難する絶好の材料を手に入れた。毛沢東は、「いいぞ、我々は鞭を手に入れた、この好機を捉え攻勢をかけよ」と発言し、モスクワにいる周恩来に次のような内容の至急電を打った[17]。

① 中共中央を代表し、ソ共中央に対し正式に厳重抗議せよ
② ソ共新指導部が団結を破壊し、「フルシチョフなきフルシチョフ主義」を継続していると非難せよ
③ 「不怕大吵大闹（大げんかになることを恐れるな）」会談が決裂しても構わない
④ 中共の原則的立場を堅持し、ソ共が錯誤を認めない限り、公開論戦は止めないと通知せよ

北京からの至急電はブレジネフ、コスイギンらソ共中央が中共代表団の宿舎で昼食中に届いた。周恩来はその

[12] Prozumenshchkov（2010）381 ページ
[13] 李丹慧（2010）398-399 ページ
[14] 李丹慧（2010）400 ページ
[15] 李丹慧（2010）407-408 ページ
[16] 李丹慧（2010）403 ページ
[17] 李丹慧（2010）410 ページ

場で抗議を提出した。周恩来は、この事件を「酔っ払いの不規則発言」としてやり過ごし、正式会談を有利に進めることが出来たであろう。しかし、毛沢東からの最高指示は、周恩来にそのような裁量を許さなかった。会談を通して、周恩来は毛沢東のメッセンジャーとして振る舞った。

3. 会談決裂

1）マリノフスキー事件

11月7日夕刻、クレムリンで記念式典歓迎レセプションが開催された。周恩来は歓迎挨拶を終えたばかりのソ連国防部長のマリノフスキー元帥に歩み寄った。マリノフスキーは周恩来に話しかけた。マリノフスキーは酔っていた。この話の内容が問題となった。一体、マリノフスキーは何を話したのか。

ロシア国家現代史档案**馆**副主任のプロズメンシチコフはソ連側の資料に基づき、マリノフスキー発言を次のように再現している。

「フルシチョフの時代は終わった、個人が両国関係に干渉することがあってはならない、毛沢東やフルシチョフのような人間に我々の関係を阻害させてはならない。」[18]

プロズメンシチコフはこの発言を、当時の政治指導者たちの多数意見を代弁したものだったと指摘する。マリノフスキーは、酔いにまかせてソ連の本音を明かしてしまったことになる。ロシアでは酔った上での発言は許容される。この発言が「事件」となったのは、先ず、マリノフスキーがあまりにも不注意だったためである。元帥は多くの西側外交官がいる中で、大声で話し、発言は即座に西側メディアに伝わった。次に、中国側が故意にこの発言を重大視したためである。周恩来には康生らが監視役としてついていた。彼らは発言を「毛沢東の失脚を示唆したもの」と解し、北京に打電した。中国代表団は即座にレセプションを退席し、北京からの指示を待った。北京の反応は前述したとおりである。

華東師範大学研究員の李丹慧は中国側資料に基づき、マリノフスキー発言を以下のように、率直かつ口語的なものとして記述している。

「**我们不要让任何鬼来扰乱我们的关系**（何者であっても我々の関係を乱すことは許されない）」

「**我们不要任何毛泽东、不要任何赫鲁晓夫来妨碍我们的关系**（たといそれが、毛沢東であっても、フルシチョフであっても）」

中国側資料では、周恩来がその場を離れた直後に、マリノフスキーは続けて

「**我们俄国人搞掉了赫鲁晓夫、你们也要搞掉毛泽东**（（我々はフルシチョフを除去した、次はあなたたちが毛沢東を取り除く番だ）」

と話したとなっている[19]。

周恩来からの抗議を受けたソ連代表は弁解に追われた。ブレジネフは、こうした思慮に欠けた発言はクレムリンの見解を反映したものではないと何度も弁明し、マリノフスキーは自らの「不正確な表現」について謝罪した[20]。

2）会談

11月9日夜、クレムリンで行われた第一回正式会談において周恩来は以下のような発言をした。

① ソ共の同志がフルシチョフ主義を捨て去ることを勧告する
② ソ共が20大以降の路線を維持する場合、関係改善はありえない

こうした周恩来の発言に、ソ連側は驚愕し、怒りをつのらせた。周恩来はソ共の20大から22大に至る路線を否定した。つまり、中国はスターリン後のソ連の路線を全否定したのである。ソ連に対する露骨な内政干渉であった。

ソ共の主張は以下のようなものであった。

① 20大の政治路線は個人が決めたものではなく、ソ連全体の意思を代表している
② 今回の会談は総路線問題を討議する場ではない
③ 双方とも「向前看（前を見る）」をすべきであり、「向後看（後ろを振り返る）」をすべきではない
④ ソ共は20大以来の路線・綱領を見直すつもりはない

ソ連が中国の批判を受け入れることができないのは明らかであった。もし受け入れれば、それはソ連が自らの誤りを公式に認めたことになり、国際共運におけるソ連の影響力は大きく低下する。ソ連は中ソ和解の幻想を捨てた[21]。

11日、両党は6時間に及ぶ第二回会談を行った。会談で周恩来は中国の以下の決定を「通報」した。

① 中国は団結の維持を希望する
② 中国は12月に開催が予定されている「起草委員会準備会議」に参加しない
③ ソ連がフルシチョフ路線を継続する限り、公開論争は停止しない
④ 中国代表団がモスクワ滞在中にソ共と行ったあらゆる会談や声明については一切論評せず、新聞発

---

[18] Prozumenshchkov（2010）382-383ページ

[19] 李丹慧（2010）409ページ

[20] Prozumenshchkov（2010）383ページ

[21] 李丹慧（2010）412ページ

表も行わない[22]

ソ連側は「起草委員会準備会議」のモスクワ開催に拘った。中ソの最初の会談が何の成果もなく終了する事態は避けたかったからである。また、ブレジネフらには、できるだけ多くの兄弟国をモスクワに集め、彼らにソ連新指導部への支持を表明させたいという意図があった。ソ連側は日程の遅延を提案した。

しかし、中国はあらゆる機会を捉えてソ連が「フルシチョフなきフルシチョフ時代」に留まっていると批判し続けた。例えば、周恩来はミコヤンが「イデオロギー問題に関しては、中央委員会とフルシチョフ同志の間に意見の相違はない」[23]と発言したことを捉えて、このような状況では両党関係の改善は望めないと会談中止をほのめかした。

3）会談決裂後

会談の最終局面は平静に終始した。会談の最終日12日には双方が「**客气的话语**（外交辞令）」を交換した。周恩来は「相互信頼」が重要と表明し、毛沢東が1964年秋にソ連代表団団長のグリシン（Grishin）に対して話した「我々の対立は一時的であり、団結こそが永遠だ」という言葉を繰り返した[24]。

ブレジネフは最終日に、両国の高級会談を提案した。提案は、会談を党と国家の高級代表によるものとし、場所はモスクワあるいは北京で、形式は公開でも秘密でも構わない、というものであった。ブレジネフは、周恩来のモスクワ会談提案をそのまま裏返しにして逆提案したのである。周恩来は提案を中央に報告するとし、「我々の門は常に開いている」と言明した。しかし、ソ連側の記録では、その後中国が高級会談を検討した形跡はない。ソ連側は、周恩来には何らの権限が与えられていないこと、北京にいる毛沢東が代表団の全ての行動を管理していることを改めて確認した[25]。

会談は表面的には平静に終了した。双方は相手の立場を理解した。これ以上、攻撃的で無益な討論を繰り返すことは無駄であった。ソ連の指導者たちは、今回の会談が関係正常化への足がかりとなり、中国がソ共に歩み寄るのではないかと考えた。しかし、会談に参加したソ連代表の多くはそのような考えが間違いだったことに気付かざるを得なかった[26]。

毛沢東は意図的に会談を決裂に追い込んだ。会談の決裂こそが毛沢東の望んだものであった。毛沢東は、協議というものについて「**试探是必要的、没有达成什么协议是不奇怪的、有一点收获也就够了**（探りを入れることは必要だ、協議とは成立しないものであり、少しでも成果があれば充分だ）」[27]と語っている。毛沢東の目標はソ共新指導部の「底線」を探ることであり、彼ら新指導部が原則問題でどこまで中国に妥協するかを知ることであった。この目標は達成された。中国はまた、ソ連に対して正面から異議を唱えることのできる国、というイメージを世界に向けて発信することが出来た。モスクワ会談以後、中国は国際共運への関与を強化しはじめた。

会談終結直後の11月13日、周恩来と**乔冠华**はモスクワの中国大使館で演説し、ソ連批判を繰り広げた[28]。ソ連側の資料では、周恩来は「修正主義者は頑固に抵抗している、彼らとの闘争を積極的に進めなければならない」と述べ、**乔冠华**は「ソ連はフルシチョフ路線を堅持し続けている。彼らは周総理の要求を一切拒否しただけでなく、代表団に対し挑戦的かつ侮辱的な態度をとった…彼らの命は長くはない。フルシチョフは12年間統治したが、彼らは長くても3年で歴史の舞台から降りるだろう…」と述べたと記録されている。

この**乔冠华**発言は、もしそれが本物だとすると、先に述べたマリノフスキー発言と同じ見解を示したものとなる。「トップが変われば、両国関係は良くなる。」言い方を変えれば、これは「トップが変わらない限り、両国関係は良くならない」ということである。彼らの願ったトップ指導者の早期退場は実現しなかった。しかし、彼らの発言は両国のトップ指導者たちが長期に亘って君臨した場合、中ソ関係がどうなるかを正確に予言していた。

ソ連では中央委員に対してのみブレジネフが口頭で会談の報告をした。報告の概要は候補委員にも伝達されたが、マリノフスキー発言は削除された[29]。ソ連知識人たちには公式報道のみが伝えられた。一方、ソ連に在留していた中国人留学生たちは、中国の会談当事者たちから会談の詳細な報告を受け取った。中国人留学生たちは各地でソ連修正主義批判を繰り広げた。

11月14日、モスクワから北京に帰ってきた代表団を毛沢東以下の中共中央が熱烈歓迎した。空港には毛沢東が先頭に立ち、100名の幹部、数千の群衆が出迎えた。これは1963年7月の「中ソ論争」勝利式典の再現であり、中共の団結を示す大衆運動であった。中共機関紙『人民

[22] 李丹慧（2010）411-413ページ

[23] Prozumenshchkov（2010）382ページ

[24] Prozumenshchkov（2010）383ページ

[25] 李丹慧（2010）413ページ

[26] Prozumenshchkov（2010）384ページ

[27] 李丹慧（2010）413-414ページ

[28] Prozumenshchkov（2010）385ページこれらは、部外秘のいわゆる内部講話であったと思われる。ソ連側がどのような経緯でこれらを入手したのかは不明である。

[29] Prozumenshchkov（2010）384ページ

日報』は会談の顔ぶれに触れただけで、実質的な内容は一切報道しなかった。毛沢東はこうしたやり方で、ソ共と決裂する決心を示したのである[30]。

ソ連も対中批判を本格化した。11 月 14 日、ソ共中央委が編集する『和平和社会主義問題』誌は今回の国際会議の特集記事を掲載した。22 の党の論評が掲載され、その中の多くの論評は名指しで中共を批判していた。ソ共中央書記のアンドロポフ（Andropov）は「中共は自己の民族利益のために、古くさいやり方で分裂活動を行った」と述べた。同誌は別稿で、中国の核実験を非難する声明を掲載した。ソ共は会談の失敗を宣言すると同時に失敗の責任を中国に押しつけた[31]。

同日、毛沢東は以下の指示を出した。

① 兄弟党国際会議の開催及び準備は「封殺（封印）」する
② 同会議の開催に反対し、参加を拒絶し、もし開会されたら非難する
③ 対ソ公開論戦を再開する
④ 対ソ批判には何の拘束も設けない、新指導部を「フルシチョフなきフルシチョフ主義」として徹底批判する[32]

11 月 16 日ソ共は全体会議を開き、新指導部の人事を行った。フルシチョフ政権の主要幹部が留任しただけでなく、新任の幹部にもフルシチョフの支持者が就任した。

中国はちょうど 1 ヶ月の休戦の後、ソ連批判を全面的に再開した。11 月 21 日の中共理論誌『紅旗』はフルシチョフ失脚の経緯を詳細に報道し、『人民日報』は現代修正主義批判記事を掲載した。

これに対し、12 月 6 日のソ共機関紙『プラウダ』はフルシチョフがかつて提唱した「全民的国家」論文を掲載し、ソ連は決してスターリン時代には還らないと主張した。記事は中共こそが「個人迷信（個人崇拝）」を維持していると批判した。

11 月 24 日、ソ共は中共に書簡を送り、12 月 15 日に開催を予定していた起草委員会の開催を 1965 年 3 月 1 日に延期すると通告した。起草委員会の開催に賛同する党は準備工作に参加できるという内容であった。毛は翌日、政治局常務委を開催し、「彼らが開きたかったら、開催させろ、彼らは深みにはまり、自らの墓を掘ることになる」[33] と語った。

[30] 李丹慧（2010）414 ページ
[31] 李丹慧（2010）414-415 ページ
[32] 李丹慧（2010）415 ページ
[33] 李丹慧（2010）416 ページ

第 2 節　中ソ関係初期設定の諸相

1. 初期設定の内容

1964 年末に形成された中ソ関係の初期設定は以下のような内容を持っていた。

1）相手国のイデオロギー設定：ソ連は中国のイデオロギーを極左冒険主義と設定し；中国はソ連のイデオロギーを右翼修正主義と設定した。
2）相手国の対外政策設定：ソ連は中国の対外政策を既存の国際秩序への挑戦、国際共運における公然たる分派活動と設定し；中国はソ連の対外政策を資本主義との妥協を図る陰謀、国際共運を裏切る反動的活動と設定した。
3）相手国の政治体制設定：ソ連は中国の政治体制を毛沢東の個人独裁の下、極左冒険主義を実行する体制と設定し；中国はソ連の政治体制を官僚独裁の下、ブルジョア資本主義の復活を図る体制と設定した。
4）相手国の指導者像設定：ソ連は毛沢東を小スターリンと設定し；中国はブレジネフを小フルシチョフ[34] と設定した。

2. 初期設定の含意

こうした初期設定は、ブレジネフ期における中ソ両国の行動にいくつかの「方向性」を与えた。

1）ソ連の行動

① ブレジネフは中国とのイデオロギー論争で守勢に立たされた。毛沢東が指摘したように、フルシチョフの政策には、資本主義的要素が含まれていたからである。フルシチョフは停滞する農業生産を活性化するために、市場経済原理の部分的導入に踏み切った[35]。また、西側との「雪解け」を演出するために、言論の自由を部分的に認めた。フルシチョフはまた、工業生産における「物質的刺激」の使用を認めた。ブレジネフはこれらの改革を次々と葬っていった。こうした「非フルシチョフ化」政策を進めていくために、ブレジネフは中国からの修正

[34] フルシチョフほどの実力も権威もない、というほどの意。中国語では蔑称となる。
[35] Ploss, S(1965), Conflict and Decision-Making in Soviet Russia: A Case Study of Agricultural Policy 1953-1963. Princeton: Princeton University Press; Yanov, A(1984), The Drama of the Soviet 1960s: A Lost Reform. Berkeley: Institute of International Studies, University of California.

主義批判を利用した。非フルシチョフ化とは具体的には、ポピュリズムから現実路線へ、大衆の党から官僚の党へ、幹部評価を成果主義から忠誠主義へ、大胆な改革の放棄、資源配分の固定化、「核兵器で通常兵器を置き換える」から「核も、海も、陸も」へという動きであった。非フルシチョフ化はソ連社会の「再スターリン化」も意味した。ブレジネフ期において、警察機能が強化され、イデオロギーの重要性が強調され、知識人は弾圧された。

②　ブレジネフは国際共運において中国からの挑戦を受けた。ブレジネフは社会主義陣営の盟主としての地位を守るべく、実力行使に踏み切った。それは具体的には、東南アジアや中東への介入であり、社会主義陣営、中でも東欧諸国への締め付けであった。ブレジネフはベトナム戦争や中東戦争に関与し、「プラハの春」事件に介入し、ブレジネフ・ドクトリン[36]を制定した。

2）中国の行動

①　毛沢東は「修正主義」が、思ったよりも強力な敵であることに気づいた。それはソ連だけでなく、社会主義陣営内部にも、そして中国にも浸透しているかもしれない。修正主義に毒されたソ連は、最早中国のモデルにも同伴者にもなり得ない。毛沢東はやがて中国社会の全面的改造に、即ち「文化大革命」に乗り出していく。手始めは「中国のフルシチョフ」たちを洗い出し、彼らを除去することであった。

③　毛沢東はソ連が中国の実力を過小評価していると感じた。中国は今やソ連の援助に頼らなければならない最貧国ではない。1964年の中国は、3年間続いた天災から立ち直り、原爆も保持した[37]。中国はソ連に替わって国際共運のリーダーとなる資格があるにも拘わらず、ブレジネフらの妨害を受けている。中国はソ連と決別し、反ソ勢力を結集すべきである。具体的には、ソ連の支配に不満を持つ社会主義陣営内の諸国とソ連の影響力が及んでいないアジア・アフリカ諸国との連帯を強化し、世界革命を推進しなければならない。やがて、毛沢東は反ソ統一戦線、いわゆる「第三世界論」[38]を提唱することになる。

[36] 陣営内の一国への脅威を陣営全体への脅威とみなし、軍事力の行使を是認する方針

[37] 中国の原爆開発については、沈志華（2010）、「援助和限制：**苏联对中国研制核武器的**方針（1949～1960）」沈志華・**李滨**『脆弱的連盟』206-244ページを参照。

[38] 第三世界論については、楊奎松（2010）、「中美和解過程中的中方変奏：毛沢東「三个世界」理論提出的背景探析」沈志華・**李滨**『脆弱的連盟』457-481ページを参照。

3. 初期設定の欠陥（バグ）

コンピューターのソフトウェア同様、中ソ関係の初期設定（デフォルト）には欠陥（バグ）がある。初期設定の欠陥は通常使用頻度が上がるにつれて表面化する。従って、欠陥の全体像を示すためには更なる研究を必要とする。ここでは、初期設定が成立した段階で既に明らかになった構造上の欠陥をいくつか指摘しておく。

1）適用限定性

この初期設定は、中ソが二国間の競争的ゲーム（いわゆるゼロサム・ゲーム）をしていることを想定している。両者の選択は、「協調」でも「部分協調」でもなく、「不信」である。相互不信の結果、両者は最低限の利益しか得られない。両者が共に「不信」を選択し続ける限り、この状態が継続する。つまり、中ソ関係の長期膠着状態は、ゲーム理論の分析から予想されるものである。

しかし、初期設定が有効に働く範囲は極めて限られている。一般に、競争的ゲームにおいては、ゲームへの参加者が増えるに従って、選択肢が増大し、利益計算が複雑化する。この初期設定は、中ソ二国だけが、外部からの影響を受けずにゲームを継続する際の参考にはなりうる。しかし、ゲームに日本、アメリカ、欧州諸国などの新たなプレイヤーが参入してくると、この初期設定は途端に機能不全に陥ることになる。

1960年代中盤には、いわゆる東西冷戦構造は既に長期に亘って存在しており、しかもその内部構造は極めて複雑化していた。従って、この初期設定は、複雑な環境の中でベストな選択を探すためには不十分で不適切、かつ最初から時代遅れなものだったのである。

2）外交の軍事化

この初期設定において、外交は協議・妥協のためではなく、もっぱら「威力偵察」のために行われる。威力偵察を行うのは軍人又は諜報員であり、外交官ではない。両国において、外交活動は不要となり、外交関連組織は縮小する。一方、軍と諜報機関は肥大化する。

3）社会の軍事化

この初期設定において、かつての兄弟は敵に転化する。相手国とのあらゆる交流は縮小し、停滞する。両国間の歴史的・文化的絆は過去に遡って否定される。それまで多数存在していた親ソ派あるいは親中派は弾圧されるか、スパイとなるか、沈黙する。両国において、社会のあらゆる活動に軍人が関与していく。

4）経済の軍事化

この初期設定において、資本主義とのあらゆる接触は

排除される。ソ連においては、非フルシチョフ化の名の下に、市場原理の導入が停止され、指令性経済が復活する。中国においては、農業における生産自主権が制限され、産業の国有化が進展する。両国において軍備が消費生活に優先され、商業活動は抑圧される。両国において、経済資源は軍備に優先配分され、「大砲あれどもバターなし」状態が続く。（了）

参考文献

日本語

亀山郁夫・佐藤優（2008）、『ロシア　闇と魂の国家』文春新書

中国語

Prozumenshchkov, M（2010）,「**苏中和解的最後尝试**：**对最新解密俄国档案的解读**」沈志華　**李滨**（Douglas Stiffler）主編『脆弱的連盟：**冷戦与中苏关系**』北京社会科学文献出版社

李丹慧（2010）、「失去的机遇？：**赫鲁晓夫下台后中苏实现和解的新尝试**」沈志華・**李滨**『脆弱的連盟』

沈志華（2010）、「援助和限制：**苏联对中国研制核武器的方針**（1949 ～ 1960）」沈志華・**李滨**『脆弱的連盟』

楊奎松（2010）、「中美和解過程中的中方変奏：毛沢東「三个世界」理論提出的背景探析」沈志華・**李滨**『脆弱的連盟』

英語

Breslauer, G（1982）, Khrushchev and Brezhnev as Leaders : Building Authority in Soviet Politics. London : George Allen & Unwin.

Gaddis, J（1987）, The Long Peace : Inquiries into the History of the Cold War. Oxford : Oxford University Press.

Pierson, P（2004）, Politics In Time : History, Institutions, and Social Analysis. Princeton : Princeton University Press.

Ploss, S（1965）, Conflict and Decision-Making in Soviet Russia : A Case Study of Agricultural Policy 1953-1963. Princeton : Princeton University Press.

Yanov, A（1977）, Détente After Brezhnev : The Domestic Roots of Soviet Foreign Policy. Berkeley : Institute of International Studies, University of California.

Yanov, A（1984）, The Drama of the Soviet 1960s : A Lost Reform. Berkeley : Institute of International Studies, University of California.